萬葉集評釋

第八卷

窪田空穗著

萬葉集評釋

第八卷

東京堂版

昭和二六年三月二〇日 印刷
昭和二六年三月二五日 發行

萬葉集評釋 第八巻（巻第十一）

定價三九〇圓

著者 窪田空穂

發行者 東京都千代田區神田神保町一ノ一七 大橋勇夫

印刷者 東京都千代田區神田神保町三ノ二九 佐野眞一

發行所 東京都千代田區神田神保町一ノ一七 株式會社 東京堂
電話神田(25)八八五—八
振替 東京 二七〇

凡例

一、第八卷は、萬葉集卷第十一の評釋を收めた。

一、本文は假名まじり文に書き改めることとし、白文を附した。

一、歌の上に附けてある番號は、國歌大觀に依つたものである。便宜の爲のものである。

一、題詞の訓は論のあるものである。今は主として新訓萬葉集に從ふ。

萬葉集評釋　第八卷　目次

凡例……二
萬葉集　卷第十一……一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

萬葉集

卷第十一

萬葉集卷第十一概說

一

本卷は、「國歌大觀」〔二三五一〕より〔二八四〇〕に至る四九〇首を收めた卷である。歌體は、旋頭歌と短歌で、長歌は含んでゐない。旋頭歌は一七首あるのみで、短歌は四七三首の多きに及んでゐる。

本卷の部立は相聞であり、その意味で卷首に「古今の相聞往來の歌の類の上」と題してある。この「上」は、卷第十二を「下」とするに對させての稱で、此の兩卷は緊密なるつながりを持つてゐるものである。

作者は、卷頭の旋頭歌一二首、及びそれに續く短歌一四九首に對して、「柿本朝臣人麿の歌集に出づ」と左註の添つてゐる物を除くと、他はすべて不明である。卽ち三二九首は作者不明の歌である。

次ぎに「古今」であるが、時代の先後は、作者と詠風に依つて決しられるものである。人麿歌集の歌は、大體その制作年代を推量することができるが、他はすべて不明であるので、詠風に依つて暗推するより他はないのである。その詠風であるが、これは或る薄弱を伴つてゐるものである。いづれも筆錄をとほして殘つてゐるのであるが、制作と共に筆錄されたのか、又は或る流動を經ての後にされたのかは不明である。更に又同時代の制作であつても、京に在住する知識人で、新を追つて息まなかつた人々の作と、部落生活を送つて農耕に從つてゐた、古風以外は知らなかつた人々の作とは、その詠風の上に相應な開きができるのである。從つて、古今といふ語は意味の廣い漠然たるものであつて、その時代の主流と目される歌の詠風を目標としての稱である。古といふのは

大體人麿歌集の歌の制作された時代、即ち藤原朝時代で、今といふのは奈良朝初期と見て大差がないであらう。年次とすると三四十年間と思はれる。

以上の期間の相聞の歌を蒐集し、旋頭歌と短歌とに限つて、整理を加へたのが本卷で、本卷をその「上」とし、卷第十二を「下」としてゐるのである。猶ほ、長歌は卷第十三として續けてゐるので、この三卷は豫め企畫を立てて編んだものと見られる。

二

本卷の資料となつた本は、書名の分つてゐるものは「柿本朝臣人麿の歌集」と「古集」とで、その他はすべて不明である。何本かの筆錄本のあつたことは、一首の歌で、「或本に云ふ」、「或は云ふ」として、別傳の物を註記してゐることで知られる。別傳のあるものは、その歌が口唱され、流動を經た時に筆錄したものであることを語つてゐるが、これは少數で、他は原形を傳へたものと見える。しかし本卷の相聞は、近親者、交友間の相聞は一首も含んでをらず、すべて男女間の戀情のもののみである點から見ると、一般性のあるものといふことを標準として、少くとも一度の選は受けてゐる歌だと思はれる。

三

編集者はそれらの多くの本を資料として、これに大小二個の分類を加へてゐる。大分類は、修辭を標準としての「正に心緒を述ぶ」、「物に寄せて思を陳ぶ」、「譬喩歌」の三部、これに形を標準としての問答の四部である。小分類は、それら大分類したものに、更に取材を標準としての分類を加へ、同類の歌を一緒に纏めたのである。この大分類の標目は、既に卷第三と第四とで用ゐられてゐるもので、新しいものではない。これについてはその際云つてゐるのでここには繰り返さないが、要するに編集者のその時代として抱いてゐた文學意識よりのもので

ある。

本卷のこの大分類は、卷第三・第四の短い時期の歌を對象としてのものであつたのとは異り、「古今」といふ比較的長い時期のものを對象としてのものである關係上、現在から觀ると、その分類が、おのづからその時期の歌風の變遷を示すものとなつてゐるといふ、編集者としてはおそらく意識しなかつたらうと思はれることを暗示してゐるものとなつてゐる。ここにはそれに觸れて概言することとする。

「正に心緒を述ぶ」、「物に寄せて思を陳ぶ」、「譬喩歌」の三大分類は、これを修辭上より觀ると、正に一線に沿つての三段階をなすもので、緊密なつながりを持つてゐるものである。

「正に心緒を述ぶ」は、古今和歌集の序にいふところのただごと歌で、譬喩を用ゐずに、その感動を直寫した歌の稱である。表現形式の美しさを極めて重大なものとしてゐる歌にあつては、これはその美しさを一應棄てゐる形のもので、その意味では原始的な、基本的な詠風である。このことは作歌態度についてのことであつて、詠んだ歌の價値について云ふのではない。

「物に寄せて思を陳ぶ」は、古今和歌集の序にたとへ歌と云つてゐるもので、譬喩を用ゐての歌である。さういふと今一つの大分類「譬喩歌」と異らないやうであるが、その間には一線が劃されてゐて、「物に寄せて」といふ方は一首の歌の中に部分的に譬喩を用ゐてゐるもの、「譬喩歌」の方は一首全部が譬喩になつてゐるものである。これも大體にさうした傾向を持つてゐるといふ程度のものである。

「物に寄せて思を陳ぶ」として差別されてゐる歌は、これを實際について見ると、枕詞或は序詞を用ゐた歌といふことであつて、大體としては序詞を用ゐた歌といふことである。上に詠風の變遷と云つたのは、この序詞といふものに對する態度が、次第に變遷してゐるといふことである。これを小さく觀れば序詞の用ゐ方の變遷とい

ふことであるが、その用ゐ方は作歌態度が決定することであつて、これを大きく觀れば、序詞を如何に解釋してゐたかといふことは、歌その物を如何に解釋してゐたかといふことと同義になることなのである。

當時より溯つての時代の枕詞、その延長とも見られる序詞の一半に近い程のものは、懸詞すなはち一語二義の關係でその冠せられてゐる詞に接續するのである。謠物として耳に聽く場合、中途で一語が遽に語義が轉換するのは、著しく興味を強められることであつたらう。しかしこのことは、一首の意義を中心として觀ると輕いことであつて、從つて序詞そのものの位置も輕かつたのである。本卷の序詞には、この意味でのものは甚だ少く、殆ど例外として混つてゐる程度に過ぎない。卽ち本卷では、さうした序詞は輕視するやうになつてゐたのである。これは言ひかへると、時代は耳を主とせず眼を主とするやうになつてゐたといふことで、當然のことと云へる。

本卷の序詞は何ういふものになつてゐるかといふと、その一半以上は譬喩である。歌は意味を重んずるところから、その意味を強く、又美しくしようとの要求から、知性的に譬喩を捉へて用ゐてゐる。しかし、これを用ゐる場合には、譬喩の形に於いてはせず、一段の工夫をして、序詞の形に於いて用ゐてゐるのである。しかも譬喩を捉へるには、必ず眼前の實際に卽して行つてゐるので、その譬喩はおのづから知性的の色が薄れ、感性的の匂ひを帶びたものとなつて來る。序詞といふ形も、同じく譬喩の知性を感性的に變へることである。標目としては「物に寄せて思を陳ぶ」と云つてゐるが、實際はさういふ程、物を重んじてゐる詠風ではなく、物よりも遙かに心を重んじてゐる詠風なのである。

本卷の序詞は、この傾向のものに止まつてはゐず、これを通り越して、更に新しい傾向を示してゐるものが、相應に多い。新しい傾向といふのは、眼前の實際を知性を働かすことによつて譬喩として捉へ、それに序詞の形を與へたといふ屈折を經たものではなく、眼前の實際を、最初から感性によつて捉へ、これを直ちに序詞の形に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

したものである。その本義との繫がりは、詞の上より觀れば卽不卽・不離不卽の微妙なものとなつてゐるのであるが、一首の氣分の上より觀れば有機的に融け合つてゐるのである。まさしく感性に依つて捉へてゐる序詞なのである。これを代表的に持つてゐるのは、「柿本朝臣人麿歌集」の「物に寄せて思を陳ぶ」の歌で、實に流通無礙にこれを行つてゐる。他のものはそれに追隨してゐるに過ぎないのであるが、しかしそれが風を成して、序詞の上に新生面を拓いてゐるのである。

この傾向の序詞を用ゐてゐる歌を觀ると、溯つての時代の事象物象を重んじた風から離れて、反對に作者自身の感性を重んじる風に移つてゐるのであるが、しかしその感性は、眼前の實際を離れたものではないので・從前には見られなかつた新歌境を、展開して來てゐるのである。感性は統一感の上に立つもので、形としては單純であるが、實際に卽してのそれであるので、實際を陰影として抱いた複雜味のあるものとなり、豐かな擴がりを持つ。又、感性は自在な動きを持つところから、その表現としての語續きもおのづから飛躍を持つた自在なものとなるのであるが、しかもその中心を貫く感性その物は、統一された單純なもので、その線に沿つてのことであるから、飛躍を持つた語續きも、難解とはならず、多彩なものとなつてゐるのである。この詠風の出來の良い歌を見ると、實際に卽しつつも感性を主とした「物に寄せて」の詠風こそ、最も眞實な詠風と信じてゐたらうと思はせられる。

「物に寄せて思を陳ぶ」の、譬喩的の序詞を感性的、或は氣分的に推移せしめたことが、藤原朝時代より奈良朝初期へかけての歌風の變遷であると見られる。

四

「譬喩歌」は、一首全部を譬喩で成り立たせたものを目標としての稱と思はれる。譬喩を序詞としたもので、

三句のものはむしろ普通であり、四句のものも時にはあるから、それを今一歩前進させれば成り立ち得るものだからである。しかしさうした歌は實際としては極めて少く、それに近い程度に過ぎないものである。

目標としてゐる譬喩歌が、果して發展し得るか何うかといふことは問題である。譬喩は根本は感性氣分に屬したものであるが、五句のうち四句以上を譬喩としようとすれば、感性氣分だけでは貫き切れず、勢ひ知性が介入して來て、大きく働くことになつて來る。事實、その出來あがつた歌を見ると、知性の勝つたものとなり、知性的に詞句をつなぎ合せた如き趣を持つたものとなる。從つて結果としては興味の淺いものとなり終るのである。

「譬喩歌」が、「物に寄せて」の歌の、譬喩に依る序詞と同じ運命のものとなつたのは、當然のこととすべきである。

五

「問答」といふ部立も、初出のものではなく、既にあつたもので、本卷ではそれを重く扱はうとしてゐるところに特色があるのである。

男女間の相聞が問答の形になることは、本來當然のことで、それを重い一つの部立にするといふことは、新たなる意義を持たせようとしてのことと見える。今、本卷の問答について見ると、問答のいづれも同一人によつて作られたもので、設けての作であるといへる。即ち文藝的意圖のもとに出來たもので、實際生活からは離れたものである。

柿本人麿によつてなされた長歌、短歌の連作は、大伴旅人、山上憶良などによつて繼承され、奈良朝初期の一つの風となつてゐる。これは歌によつて敍事的展開を遂げさせようとの要求からのことである。本卷の「問答」はそれと同傾向のもので、短歌の二首を問答に組合せることによつて、小規模ながら物語的展開を持たせ、それ

をたのしまうとしたものと見える。しかし本卷のものは輕い味ひの物ばかりで、すぐれた物はない。平安朝時代の歌物語の先蹤といふ程度のものである。

萬葉集卷第十一　目次

古今の相聞往來の歌の類の上

旋頭歌十七首（二三五一―六七）……（一三）
正に心緒を述ぶる歌百四十九首（二三六八―二四一四・二五一七―二六一八）……（一六）（一一九）
物に寄せて思を陳ぶる歌二百八十二首（二四一五―二五〇七・二六一九―二八〇七）……（五七）（一七九）
問答歌二十首（二五〇八―一六・二八〇八―一七）……（一一四）（二九五）
譬喩歌十三首（二八一八―四〇）……（三〇八）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com